The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	スコットの非合理的世界 ： 『ラマムアの花嫁』における超自然的なるもの
Author(s)	米本, 弘一
Citation	Osaka Literary Review. 1978, 17, p. 71-82
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/25647
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

スコットの非合理的世界

——『ラマムアの花嫁』における超自然的なるもの——

米　本　弘　一

『ラマムアの花嫁』(*The Bride of Lammermoor*, 1819) という作品の中には，互いに次元を異にする二つの世界が展開されている。その一つは，現実に起こる事件や人物の行動から成り立っている。この世界は，個々の出来事のつながりによってある結果がもたらされるという，論理的な因果関係によって支配されている。これに対して，もう一つの世界は，予言や迷信，伝説など，広い意味での超自然的なものをその構成要素としている。そして，この世界は，論理的因果関係を超えた，非合理的な世界である。この二つの世界は，この作品においては，互いに密接な関係を保っている。非合理的なものから成る世界は，決して直接には現実の世界に介入することはない。しかし，この世界は，象徴的な意味と暗示に満ちており，現実の世界と並行して描かれることによって，この物語に奥行きを与えているように思われる。

この作品は，スコットの小説の中でも，もっともまとまった，緊密な構成を持ったものとされている。そのまとまりを作り出しているものの一つに，この非合理的な世界の働きがあると思われる。そこで以下に，スコットの超自然的な要素の取り扱いと，それらが作り出す世界の特質と意味について論じてみたいと思う。

I

『ラマムアの花嫁』は，スコットの初期の小説の最後のものである。彼の初期の小説はいずれも，17世紀末から18世紀にかけてのスコットランド

を舞台としている。この時代のスコットランドは，イングランドとの政治的統合により，封建的社会から近代的社会へと急激に変化している。この変化によって，新旧の社会の間の価値観の対立が，さまざまな形で生じた。この歴史の変化による対立，葛藤を，スコットがどのように描いているか。また，その対立をどんな形で調和させようとしているかという問題が，彼の初期小説を論じる際に特に重視されている。

この作品においても，この対立は，はっきりとした形で示されている。この点で，この作品は，それ以前のものと共通の歴史的，社会的背景を持っていると言えよう。しかし，この作品が，それ以前のものと大きく異なっているのは，歴史の変化による対立が，この物語では最後まで和解させられることなく，悲劇的結末を生み出しているという点である。

このことから，この作品では，スコットの歴史の変化に対する態度が悲観的なものになっているとする見方もある。R. C. Gordon は，スコットが，歴史の変化によって失なわれて行く古きスコットランドの伝統を惜しみ，近代社会に反発しているとして，この作品を「保守党的悲観論」(“Tory Pessimism”) の物語と呼んでいる。[1] 確かにこの物語は，悲観的な雰囲気を持っている。しかし，それをすぐにスコットの保守性と結びつけるのは危険である。彼は近代的社会の価値も積極的に認めようとしており，この作品でも，そのような態度を示しているからである。

また，この物語が，歴史的状況によって生み出された運命の悲劇だとする見方は，古くから多くの批評家によって示されている。最近では，Donald Cameron が，この作品には，スコットの “historical fatalism” があらわれといると言っている。[2] 確かに，現実の事件のつながりというレベルにおいて見るならば，この意見は間違ったものではないように思われる。当時の社会的状況や政治的な対立が，この物語では，恋人同士の家の間の対立を生み，それに個々の人物の性格が加わって，悲劇的結末を引き起こしている。

しかし，この物語を読み終えた時，われわれが抱く印象は，そのような

歴史的背景や個々の事件のつながりによって悲劇が生み出されたというものではない。悲劇的結末は，物語の最初からすでに決定されたものとして示されている。また，物語の中のほとんどすべての要素がこの結末に向かって収斂している。そこには，人間の力ではどうしようもない，ある避け難い流れのようなものが感じられる。これを運命の力と呼んでもよいであろう。しかし，この運命は，歴史的状況などを超えた，より普遍的な力として描かれている。それは人生の非合理的な側面をあらわしているとも言えよう。この力が，この作品を，歴史的背景を超えた，普遍的な力を持ったものにしているように思われる。

その意味において，この作品では，超自然的なものから成る非合理的世界が重要な役割を果たしている。この物語では，あらゆる不吉な予感，予言などは，必ず後になって，現実の事件として実現される。また，現実の状況と類似した伝説的物語が，事実と並行して語られている。つまり，非合理的な世界は，現実の世界と重ね合わせて描かれることによって，現実の出来事の背後にひそむ運命の力を象徴しているのである。また，この世界は，運命にとりつかれた人間の心理状態をもあらわしている。そこでここでは，その例を，この物語の中で語られる二つの伝説によって見てみたいと思う。

主人公 Ravenswood は，メランコリックで激情的な性格の持ち主として描かれているが，彼のまわりには，常に，不吉な，死を思わせるような雰囲気が漂っている。また，彼の家に関係するものはすべて，不吉なもの，悲劇的な運命を背負ったものとされている。中でも，Revenswood 家の森の中にある "Mermaiden's Well" と呼ばれる泉にまつわる伝説は，重要な意味を持っている。この泉にはその昔，水の精と思われる美しい女が住んでいたが，彼女は Ravenswood の先祖と恋に陥る。しかし，その Ravenswood が彼女との約束を破り，彼女の正体をあばこうとしたため，泉の中に隠れ，死んでしまう。それ以来，この泉は，Ravenswood 家の者に

とって，不吉な場所とされている。この伝説が，Ravenswood と Lucy の恋と重ね合わせて語られている。また，重要な事件はすべてこの泉のほとりで起こっている。Ravenswood と Lucy が初めて言葉をかわすのはこの場所である。彼は，猛牛に襲われ，気を失った Lucy をこの泉に連れて来る。そこに寝かされ，泉の水にぬれた彼女の美しい姿は，その泉の水の精のイメージと重ね合わせて描かれている。

> It was on this ominous spot that Lucy Ashton first drew breath after her long and almost deadly swoon. Beautiful and pale as the fabulous Naiad in the last agony of separation from her lover, she was seated so as to rest with her back against a part of the ruined wall, ... (I, p. 66)[3)]

この二人がひそかに結婚の約束をするのもこの泉のほとりである。そして，そこで恋人を待つ Lucy の姿にも，水の精のイメージが認められる。スコットは，彼女の美しい姿は，"The murdred Nymph of the Fountain" を思わせると言っている (I, p. 262)。また，この泉での秘密の婚約の後，二人がそこを立ち去ろうとした時，二人の上の木にとまっていた烏(カラス)が突然何者かによって撃ち落とされる。その場面は次のように描かれている。

> As they arose to leave the fountain which had been witness of their mutual engagement, an arrow whistled through the air, and struck a raven perched on the sere branch of an old oak, near to where they had been seated. The bird fluttered a few yards, and dropped at the feet of Lucy, whose dress was stained with some spots of its blood. (I, pp. 267-8)

烏の死が Ravenswood の死を，そしてその血によって服を汚された Lucy の死を暗示していることは，あまりにも明白である。 しかし，恋人同士の愛の語らいの直後の，この突然の出来事は，やはり衝撃的なものである。このように，"fatal spot" と何度も言われているこの泉と，それに関する伝説は，Ravenswood と Lucy の悲劇的な恋と運命を暗示している。

その鳥を撃ち殺したのは，Lucy の弟 Henry である。Ravenswood 家の者がいる所で鳥を殺すことは非常に不吉な運命を招くことになると言って詰問する Ravenswood に対して，Henry はその理由をはっきりとは答えない。

この点で意味を持ってくるのが，もう一人の Ravenswood の先祖，Malisius de Ravenswood と呼ばれる人物の伝説である。Ravenswood 家の紋章は "a black bull's head" に，"I bide my time" という言葉が刻まれたものである。スコットは，雄牛の頭は，"the ancient symbol of death" であると言っている (I, p. 38)。領地と城を奪われた Malisius de Ravenswood は，城を奪い返すために，小数の部下を連れて，宴会の夜に城にしのび込む。そして，給仕に化けた彼は，牛の頭を乗せた皿をテーブルに置き，"I bide my time" と叫ぶ。その合図と共に，城の持ち主は殺され，城は取り戻される。

この伝説の中の状況は，現実の物語の状況とよく似ている。Sir William Ashton に城と領地を奪われ，それによって父を殺されたと信じている Ravenswood は，彼に復讐して，財産を取り戻そうと機会をうかがっている。Sir Ashton の方も Ravenswood を怖れており，今では彼のものとなった城のあちこちに刻まれた Ravenswood 家の紋章を見て，現在の状況に酷似したその伝説を思い出し，不安にかられる。しかし，復讐をしようと，Ravenswood の森にやって来た Ravenswood は，偶然にも，猛牛に襲われた Sir Ashton とその娘 Lucy を救ってしまう。彼の復讐心の象徴ともいえる牛の頭を撃ち抜いて殺すというこの行為は，彼の気持ちが Lucy への恋へと変化して行くのを暗示しているようでもある。

しかし，Sir Ashton の招きに応じて Ravenswood の城に来た Ravenswood を見て，Henry は異常なまでの恐怖を示す。父親にその理由を問われて，彼は "What makes him so like the picture of Sir Malise Ravenswood?" と答える。そして，城の中にまだ残されている肖像画の中の Ravenswood の先祖がそのまま抜け出して来たようだと言う。父親は，彼がその先祖に似ているのは当然のことだと言うが，Henry の恐

怖はおさまらない。

> "Ay; but if he is come to chase us all out of the castle," said the boy, "and has twenty men at his back in disguise — and is come to say, with a hollow voice, *I bide my time* — and is to kill you on the hearth as Malise did the other man, and whose blood is still to be seen!" (I, p. 247)

Henry は，Ravenswood の姿に何か不吉なものを感じ取ったのであろう。烏を撃ち殺すと言う行為は，彼のRavenswoodへの恐怖と，Ravenswoodの姉への接近を拒みたいという心理のあらわれとも考えられる。Lucy と Bucklawとの結婚が決まった時，Henry は姉にむかって，次のように言う。

> I am glad you are to have Bucklaw after all, instead of Ravenswood, who looked like a Spanish grandee come to cut our throats, and trample our bodies under foot. And I am glad the broad seas are between us this day, for I shall never forget how frightened I was when I took him for the picture of old Sir Malise walked out of the canvas. (II, p. 122)

Ravenswoodは運命の力にとりつかれており，彼はこの運命の流れによって，死に向かってまっしぐらに進まされている。それを象徴的にあらわすのに，これらの伝説は有効に使われている。また，Ravenswood 自身も，たび重なる不可解な出来事や偶然の連続の中に，非合理的な運命の力を感じている。彼は Bucklaw に "There is ill luck, I think, in whatever belongs to me." (I, p. 97) と言っている。

この運命と死にとりつかれた Ravenswood が，Lucy をも自分の悲劇的な運命の流れの中に巻き込んでしまう。Ravenswoodは自暴自棄な行動を示し，自己破滅的なところがあり，あまりわれわれの同情を引かない。この物語の運命の力による一番の犠牲者は，やはりLucy であろう。スコットは，そのような Lucy に同情して，物語の初めの部分でこう言っている。

> Her life had hitherto flowed on in a uniform and gentle tenor, and happy for her had not its present smoothness of current resembled that of the stream as it glides downwards to the waterfall! (I, p. 42)

また，彼女の従順で，ほとんど自己主張のできない性格をあらわすのに，"the flower which is flung into a running stream" (I, p. 40) という表現が使われている。彼女は，さからい難い運命の力に流されているという印象が強い。

Ravenswood は Ashton 家への復讐を事実上あきらめる。しかし，Lucy を恋に陥れることによって彼女を死に至らしめ，結局は別の形で復讐をとげることになってしまう。 Ravenswood には，復讐者 Malisius de Ravenswood のイメージが，Lucy には，Ravenswood の先祖によって殺された水の精のイメージが，最後までつきまとっているように思われる。

II

次に，この作品における非合理的世界と人間の心の中の状態との関係を見てみよう。

この物語の中に描かれている人物は，ほとんどが，ある特定の欲望や目的によって支配されている。そのため，彼らは正常な判断を下すことができず，異常と思われるほど極端な行動を示す。スコットは，人間の行動を支配する，このような欲望を，"passion" と呼んでいる。そして，この言葉は，この物語の中では，あまり良い意味では使われていない。Ravenswood を支配している passion は，初めは "revenge" に対するものであり，後に Lucy への "love" へのそれに変わる。Lucy の父，Sir Ashton は，自分の地位と財産を守ることだけを考えている小心な人物であり，彼の passion は "self-interest" と呼ばれている。 そして，Lucy の母，Lady Ashton のそれは，"the honour of her house" であり，"pride" である。

この物語の悲劇的結末は，ある意味では，これらの人物の passion の働きによって生み出されたものとも言える。スコットは，passion を，人間の判断を誤まらせる，心の中の非合理的な側面から生まれるものと見ており，人間の外に存在する悪魔より，もっと恐ろしいものだと考えている。例えば，Ravenswood の復讐に対する passion を，"this monstrous passion" と呼び，心の中にひそむ "one great goodly snake" だと言っている (I, p. 96)。また，暗い塔の中でただ一人復讐を誓った Ravenswood は，悪魔を呼び出したとも考えられると言った後，スコットは次のように言って，passion の恐ろしさを説いている。

> Alas! what fiend can suggest more desperate counsels, than those adopted under the guidance of our own violent and unresisted passions! (I, p. 33)

この passion の働きを説明するのに，この物語では，超自然的と思われている世界の人物が大きな役割を果たしている。彼らは，人間の心の中にある欲望を見抜くことができる。その一人は，昔 Ravenswood 家に仕えていた盲目の老婆 "old blind Alice" である。彼女は，人間の心の動きを読み取ることができ，将来の出来事をある程度予測する力を持っている。そのため，その地方では，魔女として恐れられている。彼女は自分のその能力について，"if my mortal sight is closed to objects present with me, it may be I can look with more steadiness into future events." (I, p. 256) と言っている。彼女は，Sir Ashton に対して，Ravenswood に気を付けるようにと警告する。また，Ravenswood が Lucy と共に彼女の小屋を訪れた時，喜ぶどころか，不機嫌になる。Lucy を追い返した彼女は，Ravenswood に，彼女との恋は "fatal love" だと言って，彼女のことをあきらめるようにと忠告する。そして，"I would shield, were it in the power of this withered hand, the Ashtons from you, and you from them, and both from their own passions." (I, p. 257) と言う。彼女は，恋の passion が悪いものだと言っているのではない。

それぞれの人物の性格と，passion の向かう方向を知りつくした彼女は，この恋が危険なものであることを感じとり，彼らの passion に対して警告を発したのであろう。

Ravenswood は，一時は彼女の忠告に従おうと決心する。しかし，Mermaiden's Wellで Lucyに会った彼は，結局彼女と婚約をかわすことになる。そのため，それを知った Lady Ashton の怒りと，彼に対する憎悪をかりたて，彼女に侮辱され，城から追い返されてしまう。その帰り道，その泉にさしかかった彼は，Alice の幽霊に出会う。彼は，婚約の時に Lucy がすわっていた場所に Alice の姿を見る。目が見えず，体も不自由な彼女が，一人でこんな所にいるはずがないといぶかる彼に向かって，彼女は何かを言おうとしている。しかし，彼には何も聞こえず，近づこうとすると，その姿は消えてしまう。Alice の小屋にかけつけた Ravenswood は，彼女がたった今死んだことを知らされる。彼女は，死ぬ間際にも，彼に何か忠告をしたがっていたと言う。スコットは，この超自然的現象について，はっきりと説明することを避け，それが "the creation of a heated and agitated imagination" (II, p. 27) かも知れないとだけ言っている。Ravenswood はこの時，Lady Ashton の侮辱に傷つけられ，やはり Alice の忠告に従っておくべきだったという後悔と自責の念にかられている。彼のそのような錯乱した精神状態が，彼に忠告しようとする Aliceの姿を見させたのかも知れない。

この幽霊の出現を境に，物語は超自然的な雰囲気が支配的となる。Alice の葬式の準備をするために，三人の薄気味の悪い老婆がかけつける。Ravenswoodは，彼女らに会って，三人の魔女に出合った Macbeth のような気持ちになる。中でも，三人の中の最年長の，Ailsie Gourlay と呼ばれる老婆は，重要な役割を果たす。彼女は，予言能力を持っており，Ravenswood に会った時，仲間の一人に，彼はまともな死に方をせず，彼の葬式も行なわれることはないであろうと言う。また，彼女は，Lady Ashton にたのまれて，Lucy の気持ちを変えるために彼女に精神的迫害を加える。そし

て，彼女と Bucklaw との結婚式の時，彼女の命が永くないことを予言する。さらに，Lucy の葬式に現われた Ravenswood を見て，彼もまた，まもなく死ぬだろうと言う。これらの予言は，すべてその通りに実現されることになる。

もちろん彼女は魔女ではない。彼女も Alice と同じように，永年の人生経験から，人間の心の中の passion を見抜く力を持っている。スコットは，彼女のこの能力は，"some knowledge of the human heart and passions" (II, p. 114) から来るものだと言っている。Lucy と Ravenswood の精神状態を見て，彼女は二人の死を予測したのであろう。

また，彼女は，Lucy の狂気の原因が，母親の異常なまでの精神的迫害であることを知っている。Ravenswood と Lucy との結婚は，Ashton 家にとって，政治的にも，財産を守るという点からも，都合の良いことばかりなのである。Lady Ashton の反対は，ただ Ravenswood に対する偏見と憎しみによるものである。Sir Ashton は，このような妻の行動について，"it would be the act of a madwoman!" (I, p. 239) と言っているが，彼女の行動は事実狂気に近い。Ailsie Gourlay は，Lady Ashton が "pride" という passion に取りつかれていることを説明する。彼女は，Lady Ashton の姿を見て，

> There's mair o' utter deevilry in that woman, as brave and fair-fashioned as she rides yonder, than in a' the Scotch witches that ever flew by moonlight ower North-Berwick Law. (II, p. 144)

と言い，彼女の異常なまでの passion の力が，悪魔よりも恐ろしいものであることを強調している。また，Lucy の葬式の時，仲間に，この事件には悪魔が介在しているのではないかときかれて，彼女はそれを否定する。そして，部屋の肖像画がいつの間にか Malisius de Ravenswood のものにかえられていたことについて，その絵が現われたのは，人々に "pride" に対する警告を与えるためだと説明する。魔術に精通していると信じられ，非合理的世界の代表とも言える彼女が，この物語では，人間の心の中の悪

魔，つまり非合理的な側面を説明する役割を負わされている。

結末の部分で，狂気に近い行動を示す人物がもう一人いる。それは，Lucyに裏切られたと信じ込み，絶望的となったRavenswoodである。彼は，Lucy と Bucklaw との婚約の場面に突然現われるが，Lucy の心理状態と健康状態が正常なものではないことを見抜くことができず，彼女の裏切りを責め，激しくののしって立ち去る。Lucy はこのために完全に正気を失い，婚礼の夜，Bucklaw を刺し，自分も死んでしまう。彼女を狂気に追いやったのは，Ravenswood と Lady Ashton の，激しい passion にかられた，狂気に近い行動であると言えよう。

Ravenswoodの死もまた，狂気によるものである。物語の中頃に，Thomas the Rhymer 作と言われる，不気味な予言の詩があらわれる。それは，Ravenswood の城に向かおうとする Ravenswood に，召使い Caleb から告げられる。

When the last Laird of Ravenswood to
　　Ravenswood shall ride,
And woo a dead maiden to be his bride,
He shall stable his steed in the Kelpie's flow,
And his name shall be lost for evermoe! (I, p. 234)

Ravenswood はこれを，迷信だとして，信じない。そして，“why any man in his senses should stable a steed there —”と，正常な神経の持ち主が，そんなことをするはずがないと言う。しかし，Lucyの死によって，彼女の本当の気持ちを知らされた彼は，錯乱した精神状態のまま，彼女の兄との決闘の場所に向かい，この詩の通りに，流砂の中に馬と共に巻き込まれてしまう。

この物語の後半部分は，魔女や悪魔が現実の事件を引き起こしたかのような印象を与える。しかし，スコットは，はっきりとそれを否定している。これらの要素は，人間の心の中の欲望や感情との関係において描かれており，人間の心の非合理的な面の恐ろしさを説明するのに使われている。

スコットの小説について論じる時，常に問題となるのが，彼の「二面性」(duality) — つまり，合理的な側面とロマンティックな側面 — であるが，それは，超自然的なものに対する彼の態度にも現われている。彼は，魔術や魔女，神秘学などに対して，深い興味と知識を持っていた。[4] しかし，そのようなロマンティックな興味と共に，それらを学問的に研究し，無知から来る迷信や不必要な恐怖を取り除こうとする合理的な態度も示している。そして，彼の小説のほとんどにおいては，これらの要素は，あまり大きな役割を果たしていない。その意味でも，この作品は，例外的なものと言えよう。

この作品におけるスコットは，超自然的要素の使用に関して，特別の注意を払っている。彼は，当時流行したゴシック小説の氾濫に，少々辟易気味であったように思われる。彼は，これらの要素を，ただ読者を驚かせ，恐怖を与えるためだけに使ってはいない。また，ラドクリフのように，それらを合理的に説明し尽くしてしまうようなこともしていない。彼は，これらの非合理的要素を，人生や人間の運命の，また，人間の心の中の，非合理側面と関係させることによって，象徴的な世界を作り上げることに成功している。

註

1) Robert C. Gordon, "*The Bride of Lammermoor*: A Novel of Tory Pessimism", *Walter Scott: Modern Judgements*, ed. D. D. Devlin (London: Macmillan and Co. Ltd., 1968), pp. 130-41.
2) Donald Cameron, "The Web of Destiny: the Structure of *The Bride of Lammermoor*", *Scott's Mind and Art*, ed. A. Norman Jeffares (Edinburgh: Oliver and Boyd, 1969), p. 189.
3) Text からの引用はすべて，Waverley Novels, "Border Edition", ed. Andrew Lang (London: John C. Nimmo, 1892-4), 48 vols の中の，vol. XIV, XV の *The Bride of Lammermoor* による。ここでは，vol. XIV を I, vol, XV を II とした。
4) スコットは，*Letters on Demonology and Witchcraft* (1830) という，悪魔学と魔術についての本を書いている。